

聖書：ガラテヤ5：7～12

説教題：十字架のつまずき

日時：2013年5月26日

パウロはこのガラテヤ書で、人が救われるのは「割礼」を守ることによるのか、それともただイエス・キリストを信じる「信仰」によるのか、を論じています。パウロが伝えた福音は、人は自分の行ないによってではなく、ただイエス・キリストを信じる信仰によって救われるというものです。しかしパウロがこの地方を去った後に、ユダヤ主義者と呼ばれる人たちが入って来ました。彼らはキリストへの信仰だけではなく、ユダヤ人のように割礼を受けてこそ、一人前の信仰者となり、救われると教えました。そしてガラテヤ人たちはその教えに動かされつつあったのです。そこで急いで彼らに書き送ったのがこの手紙です。

パウロはここで彼らに語りかけます。「あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わせなくさせたのですか。」パウロはここで彼らのかつての姿を「よく走っていた」と表現しています。ダラダラ歩いているとか、立ち止まっているとは表現しません。真理を知り、励ましを受け、目標に向かってひた走ること。神の恵みによって必ず天国に入れることを確信し、そこに入るにふさわしい者となるために神が招いている道を一生懸命進むこと。ところがガラテヤ人たちはその歩みをストップさせてしまっていました。誰があなたがたを妨げたのですか、とパウロは言っていますが、もちろん答えは分かっています。それはユダヤ主義者たちです。その彼らに従って歩むことはどんなに危険なことであるか、パウロは3つの警告を語っています。

一つ目は8節：「そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。」一言で言えば、ユダヤ主義者たちの教えは、神からのものではないということです。パウロは1章6節で、神は「キリストの恵みをもって」私たちを召してくださった、と言いました。ただキリストにある恵みに基づいてのみ、私たちを救いへと召しておられます。ところがユダヤ主義者たちが宣伝している教えは、人間の行ないに基づく救いです。これは神の方法と全く対立します。それが神から出ていないことは明らかです。ではどこからこの勧めは出て来たのでしょうか。単なる人間の考えとこれを見なすべきでしょうか。それとも偽りの父サタンからのものと言うべきでしょうか。パウロは、はっきりはそう言いません。しかしこの道を進むなら、神が備えて下さった道から外れていくことは明らかです。

二つ目の警告は9節：「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。」パン種は最初に見た時は小さく取るに足りないものですが、粉の中に浸透すると、パン全体にとてつもない影響を及ぼします。イエス様も福音書の中で「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。」と言われました。同じようにユダヤ主義者たちの教えを軽い気持ちで受け入れていると、それはやがてその人に取り返しのつかない影響を及ぼします。容易に私たちの考え方、行動の仕方のすべてに行き渡りやすい。そうなったら、その人は4節で見たように、律法によって義と認められようとする生き方をすることによって、キリストから離れ、恵みから落ちてしまうという最悪の結果に至ってしまいます。ですからこのパン種を甘く見ず、急いで取り除かなければ

ならない。

そして三つ目の警告は 10 節です。パウロはまずそこで「私は主にあって、あなたがたが少しも違った考えを持っていないと確信しています。」と言います。パウロはガラテヤ人たちが正しい福音の立場に必ず立ち続けることを確信しています。これは「主にあって」の確信です。一度しっかり福音を聞き、イエス・キリストに確かに結ばれた彼らですから、主が彼らを支え、必ず正しい状態に引き戻してくださると彼は信じている。しかしユダヤ主義者たちについてパウロは 10 節後半で、「さばきを受けるのです」と言っています。ユダヤ主義者たちのパン種はあっという間に拡がるでしょう。パン全体を膨らませるほど、大きな影響力を見せるでしょう。しかし決してそのままでは終わらないのです。神から出ていない教え、また神の教会をこのような混乱に投げ入れる人々には必ず神のさばきが最終的に下る。このことをしっかり見据えて、早くにこの偽りの危険な教えから離れるべきである、とパウロはガラテヤ人にアピールしているのです。

パウロは続けて言います。11 節前半：「兄弟たち。もし私が今でも割礼を宣べ伝えているなら、どうして今なお迫害を受けることがありましょう。」かつてのパウロは確かに熱心なユダヤ教徒・パリサイ人として、割礼の重要性・その不可欠性を強調していたでしょう。しかしクリスチャンになり、世界伝道していたこの時もそうである、とある所では言われていたようです。これは単なる誤解だったのか、それとも意図的な曲解だったのか。考えられることは、パウロは救いの条件として割礼が問題にされる時には断固としてこれに反対しましたが、ユダヤ人が先祖からの慣習としてこれを受けるとについては反対しなかったことです。たとえばこの手紙の 2 章 3～5 節で見たように、ギリシャ人テトスの場合は一時も譲歩せず、決して割礼を受けさせませんでした。ユダヤ人の母を持つテモテを伝道旅行に連れて行く時には割礼を受けさせました。こうしたことから、パウロは今でも割礼を宣べ伝えているという情報が、ある所では流されていたのかもしれない。

しかし、パウロは、自分は割礼を宣べ伝えていない明白な証拠があると言っています。それは何でしょうか。それは迫害を受けているということです。割礼を宣べ伝えている人は、迫害を受けません。なぜならそれは人の反感を買わないメッセージだからです。それはあなたは自分の行ないによって自分を救うことができる、あなたにはその力がある、と語るものであり、それは人を持ち上げ、人にへつらうメッセージです。ところが十字架の福音はそうではありません。これは聞く人々につまずきをもたらします。なぜならそれは、あなたは自分で自分を救うことはできないと告げるからです。ただキリストのみがあなたを救う。その救いを受けるためにはあの呪いの木にぶら下げられた方の前でひれ伏さなければならない。これは人間にとって聞きたくない教えです。なぜあんなカッコ悪い人のもとで頭を垂れなければならないのか。なぜあんな人に私を救ってくださいとこいねがわなければならないのか、私はそんなみじめな人間なのか・・・これは人間のプライドに挑戦します。ですから人々はつまずき、これを伝える人を拒絶し、軽蔑し、迫害するのです。パウロはまさにその仕打ちを受け続けていました。そこに、私が割礼を宣べ伝えているのではないれっきとしたしるしがある、と彼は言っているのです。

ここに私たちは改めて、福音が忠実に伝えられるなら、つまずきや迫害は避けられないということを学びます。ですから私たちは福音を伝えれば、皆が喜ぶだろうという甘い期待を持っていてはならないのです。このことをしっかり心に留め置く時、私たちは人に受け入れられることを過度に求め過ぎないようにと戒められます。そのあまり、つまずきの要素を減らし、これを薄める仕方で福音を提示してはならない、と。福音はつまずきのメッセージなのです。ですからもし私たちが未信者の前で話した時に、皆が皆喜んで聞いて、あなたの話は素晴らしかったと言って来たら、自分は福音を不適切な仕方で話してしまったのではないかと反省してみる必要さえあるということになります。私たちは人間的な知恵によらず、ただ神の主権と力により頼んで宣教活動にあたらなければなりません。神が奇跡的な仕方でその人の心の目を開いて下さるのでなければ、その人は決して真理を見ることができないし、救われることはできない。私たちにとって大事なものは、人々の顔色を伺って受け入れられやすいメッセージを語るのではなく、福音の真理にしっかり立つことでしょう。多くの人にとって十字架の福音はつまずきであり、愚かであっても、信じる人にとっては神の力です。このつまずきを取り除くことによって、そこにこそ備えられている最も本質的なキリスト教の救いを骨抜きにすることがないように、私たちは心して、このわざに当たって行かなければなりません。

さらにパウロは 12 節のように言います。「あなたがたをかき乱す者どもは、いっそのこと切り取ってしまうほうがよいのです。」この「切り取る」とはここでは男性の性器を切り取る、それを切除するということでしょう。言うならばパウロはこう言っているわけです。「そんなに包皮を切り取ることが大事だと言うなら、いっそのこと全部切り取ってしまったらどうか。そうして宦官になったらどうか。去勢してしまったらどうか。」口語訳や新共同訳は「自ら去勢してしまうが良い」と訳しています。

これは聖書に載せるにはあまりにも品のない、悪い冗談ではないでしょうか。しかし、私たちが押さえるべきは、パウロは決してこれを個人的な復讐心から語っているのではないということです。参考になるのは詩篇の中に「呪いの詩篇」と呼ばれるものがあることです。詩人も時に、敵に呪いが下るようにと神に祈っている場合があります。敵のためには呪いではなく、赦しを祈るようにとイエス様は言っているのではなかったか、などと私たちは思います。しかし詩篇の詩人も、ここでのパウロも、個人的な恨みつらみを述べているわけではありません。ここでパウロの心を支配していたものは、神の栄光です。キリストの測り知れない犠牲によって備えられた福音が、ユダヤ主義者たちによって曲げられ、無に帰されようとしています。ただ神の恵みによる救いが、人の行ないに基づく救いに置き換えられようとしています。そして現にガラテヤの諸教会がかき乱されつつあります。その時、パウロは、ただ神の栄光こそがこの福音を通して光り輝くことを求める熱意のゆえに、これを妨害し、多大な悪影響を及ぼす者へのさばきと呪いを願わずにいらなかった。私たちは「人への呪い」にだけ注目して考え込んでしまっていますが、これは神の栄光を追い求めるひたむきな熱心さから出ているものであることを考えて見なければなりませんし、そういう意味で私たちももっとこのような正しい熱意が、自分の中に培われることを求めるべきでしょう。

私たちはこの福音が、パウロがここまで神の栄光のために死守しようとした貴重な福音であることを知っているでしょうか。またそのことを思って自分もこの福音を尊び、この福音の真理を死守しようとしているでしょうか。私たちは自分が住んでいる文化にフィットしたいと思うものです。できれば周りの人々から好かれたい。嫌われたくない。人々から受け入れてもらいたい。また私の信じているキリスト教が良いものであることを分かってもらいたい。友達や家族をつまずかせたくない、と思います。しかしそのあまり、福音を改変してはならないのです。十字架の福音は人々にとってつまずきとなるものです。これを聞いた人々が拒絶反応を示し、眉をひそめても当然なものです。それを伝える私たちを見て、この人は正気なのかという顔をし、蔑み、見下したとしても当然なのです。パウロを始め、私たちの信仰の先輩たちはみな、そのように迫害されてもこの十字架の福音を死守して来ました。私たちもこの福音を曲げることなく、むしろこの十字架こそを誇りとし、宣べ伝えて行きたいと思います。人々がこれにつまずくことを恐れるあまり、これを除いたり、幾分でも弱め、隠すというようなことはしないようにしたい。なぜならこの十字架との対決を通してこそ、人は自分の罪という最も大事な自分の問題にはっきり向き合わされるからです。そして十字架の下で自分の罪が分かる時に、人はそんな者を限りない愛をもって救ってくださるキリストと出会い、そのつまずきを越えたところにある神が用意された完全な救いと祝福とに生かされるからです。